

## 批評：Total Physical Response(TPR)を行ってみて

増山栄一エリック

【キーワード】日本語教育、日本語教授法、TPR

### 1. はじめに

私は過去20年ほどの日本語教育の経験の中で様々な教授法で日本語を教えてきた。私が大学院の助手の時から慣れ親しんでいるコミュニカティブアプローチに加えてオーディオリングアルアプローチにナチュラルメソッド、サイレントウェイ等々。私の経験から言えば、これが絶対の教授法というものではなく、すべて学習状況や学生のニーズによって様々な教え方を用いて教授するのがベストであると考えている。Total Physical Response (以降TPRと略す)は当然のように、その存在を熟知していたが、「学習者からのその教授法に対する幼稚さへの不満が多い。」と言った批評が多く、それが私の耳に入ってきていたので、忙しさにもまぎれて、TPRをそれ以上に追求する機会も余裕もなかった。しかしその機会が昨年やって来た。

大東文化大学の別科のレベル2の授業でその担当主任であり、TPR教授法に深い関心と豊富な経験を有する松嶋緑講師の指導の下で、同僚の塩田安佐講師と共に2005年前期に1日1回10分ほどのTPR授業を導入した。下記に1) TPRを行って学生の反応を見た際の私の感想や感触、2) TPR導入時におけるその効能や効果、及び3) TPR教授法を別科授業で行うことに関しての今後の展望と言った3つの角度から、私のTPR教授法に関する私見を記述してみたい。

### 2. TPRを行って学生の反応を見た際の感想や感触：

「新・はじめての日本語教育2」の中で、その著者である高見澤孟氏は、TPR教授法の欠点を「この教授法の問題点は、他の教授法による外国語学習経験者の場合、戸惑ったり、やり方の幼稚さに不満を抱いたりすることです。」(高見澤：2004年、160ページ)と述べている。私が事実それを行ってみて持った感想はまさにそれであった。加えてTPRを始めて3ヶ月ほどが過ぎた6月には学生達から「またTPRをするんですか？」という拒否反応が表れた。学生達にその理由を尋ねると、「つまらない。」とか「子供のゲームのようだ。」と言った意見が発せられた。

前期授業開始前に半日程を費やしたTPR教授法セミナーを行っていただいた際にTPR使用授業のデモテープを拝見したが、それは先生のインストラクションで、与えられた物をテーブルの上の物体の前後や左右に置くと言う授業であった。その授業に取り組む学生達の「しっかり聞かないといけない！」と頑張っている学生達の真剣な表情が強く印象に残ったが、実は自分のクラスでそれと同じタスクを行った際に、同様の真剣な眼差しを私の学生達にも伺うことができた。しかしそれは私が長い間行って来たコミュニカティブアプローチでも同じタスクは行

うし、同じ様な学生からの反応も期待できる。それに加えて直説法やコミュニカティブアプローチで大切にされているタスクを通しての学生達の発話の促しも行われて、言語習得における自然な流れも生まれて来る。聴解優先という観点に立って、学習者が耳慣れない外国語の発音を真似なければならぬというプレッシャーから開放されると言った考えには賛同する所もあるが、それはあくまで言語学習の初期の段階に必要とされることで、3、4ヶ月も続けるべきであろうか。それが故に上記の様な学生からの拒否反応が出てきたのではないかと考える。

高見澤氏は学習能力育成には実社会での体験がもっとも有効な手段であると述べ、「教師はそれを充分配慮した上で教室内でも学習者に実社会でのような疑似体験を与え、経験と同様な効果を挙げるよう努力することが求められることとなります。」(高見澤：2004年、169ページ)と「新・はじめての日本語教育2」に記述している。私も同意見である。従って、例えば、「…ながら…」や「…まま…」と言った文法項目をTPRで紹介する際に、「右手を上げながら、左手で書いて下さい。」とか「立ったまま、本を読んで下さい。」と言ったコマンドは果して上記の教授理念から考えた場合、フォーカスを失っている様に感じざるをえない。

### 3. TPR導入時におけるその効能や効果：

それでは、TPR導入による効果はいかなるものであろうか。言語学習は積み重ねであるので、例えば、ある文法項目をTPRを使用して導入した際の効果は？と言われても私には答えることはできない。しかし、レベル2教授の8ヶ月間を振り返って見た時、学生達の会話能力の伸びの少なさに私は驚いている。前期開始当初のレベル2の学生の能力はかなり高く、それが故に私は後期末時にはかなりの会話力の伸びを予期していた。しかし、それはコミュニカティブアプローチを利用した場合の私の予想であり、別科と言う大学へ入る為の準備課程の日本語教育ではカバーするものも多い為、結局は私の期待のし過ぎであったのであろう。それではTPRが目指している聴解力の習得はなされたのか？という質問にも私は答えることはできない。「聴解」と言うクラスが存在していて、そこで学生達は聴解のトレーニングを受けている為、TPRのみが聴解の練習媒介ではなかった。

では、TPRを使つての新文法導入は効果があったであろうか。高見澤氏は前述の著書の中で、「成人の学習者は、学習を始める前に何を学ばされるのか、それは意味のある学習なのか、それを学習するとどんな利益があるのか、などを考えるものです。そんな疑問に答えて学習目標を明らかにしておけば、学習動機の強化につながり、学習促進の上からも効果的です。」(高見澤：2004年、48ページ)と新しい課における目的理解の重要性を述べている。別科と言う「1年で日本人学生達と一緒に勉強できるだけの能力を習得させる」学習課程において、新文法導入は上記のように導入時に明解に提示されて、即説明、即練習といった別科で従来から行っている教授法が正当ではないだろうか。毎日10-15分の時間をかけて、TPR教授の中で不慣れな文法を身振り手振りで学習して、それを100%理解できるのであれば良いが、説明なしでどれだけ把握できるのだろうか。「後で補足すればいい！」と言う意見も当然あるであろうが、なぜ重複をしなければならないのか？個人的な意見として、私はその重複の時間を、今回後期末に問題として表れた多くの学生の日本語発音の未発達に口頭練習を行う事で、費やしたいと考える。

加えて、学生達がTPRに興味や関心を示しているのであれば、そのクラスでの使用も意味

があるかもしれないが、前述の様に学生達からのネガティブなフィードバックを考慮すると、私はその使用に対して躊躇の念を抱かざるを得ない。事実、TPRの着目点は「幼児は母親などの口まねをして話し始める前に、かなりの期間にわたって周囲の人たちが呼びかける言語を聞くことに専念し、その意味を理解しようとしている。」(高見澤：2004年、160ページ)であって、レベル2のような初中級の学生をターゲットにするのではなく、全くの初級学生を対象とすべきではないだろうか。

#### 4. TPR教授法を別科授業で行う事に関しての今後の展望：

1980年代から私の学術分野である社会科学の領域で、“blurred genre”という言葉が頻繁に使われるようになった。つまり文化人類学、歴史学等と言った伝統的な学部、学問の見地からのみ社会現象を考察するのではなく、様々な見地からの評価、研究を重視して行く共同的及び協調的アプローチの事で、国際学、アジア学、日本学、女性学等のinterdisciplinary studiesの分野ではそれが当然となっている。また、外国語教授法でもそれは同様で、1つの教授法にのみ依存するのではなく、学習者の学習目的達成を重視する脱教授法時代が今の主流となっている。高見澤氏も日本語教育と教授法に触れて、「日本語教師は一つの教授法にこだわることなく、いろいろな教授法の理論を学び、それらの指導技法を身に付けておくべきです。」(高見澤：2004年、46ページ)と提言している。

従って、私は今回のTPR教授の試みを通じて、それを適所で使用することが可能であると考え。特に初級の学生への試みや、聴解力に欠ける学生への集中使用等にも適している。最近ではコンピューターを使った海外とのコミュニケーションも当然の流れとなり、翻訳にも重きが置かれ始めている。翻訳法といえ、 “a thing of the past” となってしまうが、その翻訳法もこれからの国際社会化を考えれば、改めて必要になって来るであろう。事実、今回TPRのクラス内での使用の試みに賛同した理由もすべて、これからやって来る日本語教育多目的ニーズ時代への準備の一環であった。教授法にこだわるのではなく、状況やニーズに対応していく柔軟性が21世紀の日本語教師にも求められていると言える。

#### 参考文献：

- 高見澤孟『新しい外国語教育法と日本語教育』1989年、アルク
- 高見澤孟『新・はじめての日本語教育2』2004年、アルク
- 高見澤孟『はじめての日本語教育 [基本用語辞典]』1997年、凡人社
- 高見澤孟他『新・はじめての日本語教育1』2004年、アルク